

小・中学校の適正規模について

学校は、知識や技術を身に付けるためだけのものではありません。児童生徒相互が、児童生徒と教職員等が、豊かな人間関係を築き、子どもたちが社会性などを身に付けるための場でもあります。

子どもたちが活動する場をイメージしていただきたい。どんな姿をイメージされるでしょうか。

習熟度別やチーム・ティーチングなど、いろいろな形態による効果的な学習を行ったり、子ども集団の練り上げ、相互作用による思考力の育成を図ったりするためには、活動に応じて少人数のグループから多人数の大きなグループまで目的にあった適切なグループを組むなど多様な教育活動を展開する必要があります。そのためには、学校にはある程度の規模が必要です。

そこで、児童生徒にとって質の高い教育を保証できる学校規模を協議・検討いただくための一つの資料として、小規模校の一般的なメリット・デメリットについて、子どもたちの学習面・生活面、学校運営面の三点から報告させていただきます。大規模校については、特に述べませんが小規模校の裏返しと考えられます。

□小規模であることのメリット

【 学習面 】

児童生徒の一人ひとりの個性や特性に応じた教育活動が行いやすく、個々の能力や適性を伸ばしやすい。

学校全体での児童生徒の掌握が容易である。

クラス替えが無いので、互いの関係を深めて学級づくりがしやすい。

【 生活面 】

児童生徒が互いによく知り合え、全校の児童生徒・教職員の一体感が深まりやすい。

異学年交流を重視した教育活動により、全校的な児童生徒の交流が深まりやすい。

【 学校運営面 】

教員相互の連絡調整や連携がとりやすく、学校内の教育活動等に一貫性をもたせやすい。

教室・体育館・校庭などに比較的余裕があり、活用しやすい。

校外行事の場所の選定、活動内容や安全面での制約が少ない。

□小規模化によるデメリット

【 学習面 】

集団規模が小さいと体育・音楽での学習そのものの成立が難しいことがある。

競い合う機会が少なくなり、運動会・スポーツ大会などでの集団活動の活性化が難しい。

話し合い活動や協働作業的な活動で、学習内容の深まりや広がりが難しいことがあ

る。(多様な意見や活動に発展しにくい。)

教員の絶対数が少ないことから、習熟度別学習などに対応した指導体制を組むことに支障が生じる。

【 生活面 】

少人数になると学級のルールや児童生徒の中の価値観が固定化されがちになり、多様なものの見方、考え方を学んだり、そこから児童生徒自らが新しいルールや学級文化、人間関係を作り上げようとする機会が少なくなる。

中学校の場合、指導する教師、参加する生徒の数が少なくなるため、部活動が制限されることがある。

児童生徒の教師への依存傾向が強くなり、児童生徒に自主性・主体性や社会性などが育ちにくい面がある。

【 学校運営面 】

少ない教員で学年経営することになり、指導計画・評価計画・教材研究等を全て個人作業で行うことになる。また、共同研究が難しく、教育相互の連携や切磋琢磨する機会が少なくなる。

中学校において、特に実技を伴う教科では教科教員の不足が生じ、専門教育が十分行えなくなる。

校務分掌や地域社会との連携、教育委員会等への調査報告等で、教員一人当たりの役割が相対的に多くなる。

緊急時や学級経営に問題が生じた場合等、他の教員による支援体制を構築することが難しくなる。

ある程度の教職経験者でないと学年経営に当たることが難しいため、教職員の年齢構成の上昇を招き、学校運営上活性化に欠けることがある。

以上が小規模校における一般的なメリット・デメリットと言えます。